

立ちどまり

棟梁が仕事の途中で、「さあ、落ち着きたばこにしましうか」と、仲間へ呼びかけているのを耳にしたことがある。「一服」という代わりに、「落ち着きたばこ」といったのが妙に心に残っている。永年の経験から得た生活の知恵とでもいってよいものが、このことばから感じられたからであろう。さまざまの刃物の使用にも、高い足場での作業にも、ひとりひとりが細心の注意を払わねばならない。とりわけ棟梁ともなれば、仲間の安全はもとより、作業の進行への配慮も怠るわけにはゆかない。「落ち着きたばこ」は、このような心術と無関係ではあるまい。

新古今集夏の部に、西行が奥州行脚の途次よんだとされる歌が載っている。

道のべに清水ながるる柳陰しばしとてこそ立ちとまりつれ

この歌に見える柳の所在については、いくつかの異説があるが、芭蕉のころには、白河の関の

手前の芦野の里にあるのがそれだと、土地の人には信じられていた。芭蕉もその伝承を信じて、「奥の細道」の旅ではわざわざその陰に立ち寄り、この歌を媒介として、尊敬する先人のイメージを具体的に思い描き、その詩魂にふれている。

西行が道のべの柳陰にしばしのいこいを求めて立ちとまったのは、形のうえからいえば、取り立てていうほどのことでもない、長い道中の平凡なひとこまにすぎぬ。しかしその柳は、かつて幾人の旅人をその下にいこわせたことであろう。再度にわたり奥州下向を試みた先輩の能因も、自分と同じくこの柳の陰に身を寄せたのではないか、という想定が、そのとき西行の内部でリアルなものとなる。そしてそこには、昔も今もこんこんと流れてつきない清水がある。その流れをみつめながら、わが旅のこし方ゆく末を静かに思いやり、翻って漂泊詩人の魂の系譜につらなるおのれを省みるとき、彼の体内に、改めておののきに似た感動が頭をもたげたにちがいない。

何物かに追い立てられるように、われわれ現代人は長い間駈足をつづけてきたが、今やげしい息切れに苦しみはじめている。この辺で、故知にならって、「立ちどまり」の静かなひとときを持つことが緊要となった。冒頭に引いた棟梁のことばは、そのことへの身近な啓示として受け取られないだろうか。

(四八・九・一九)